

第20回核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどいin鹿児島

核はもうSAIGO! DONな兵器もいりもはん!!

Physicians Against Nuclear War

反核医師の会 ニュース

第43号

2009年12月15日

Physicians Against Nuclear War (PANW)

核戦争に反対する医師の会事務局
〒900-0058 鹿児島県鹿児島市本町2-2-1
反核医師の会 会本部 鹿児島県鹿児島市本町2-2-1
電話 099-233-0127 FAX 099-233-1182
e-mail: panw@doc-nu.or.jp
http://doc-nu.es.cc.ttc.ac.jp

核戦争に反対する医師の会

全国から325人が参加

「核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどいin鹿児島」が11月21日、22日、鹿児島市内で開催された。

「核はもうSAIGO! DONな兵器もいりもはん!!」をテーマに、講演やシンポジウムなどがおこなわれた。つどいには、全国から医師、歯科医師など325人が参加。来年5月のNPT(核不拡散条約)再検討会

御礼

大いに盛り上がり、大成功に終わりました。厚く御礼申し上げます。

「第20回核戦争に反対し核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどいin鹿児島」は、1年半前から準備に入り、鹿児島開催まで紆余曲折ありましたが、天気が悪い中、県内外から多くの方々(総参加者数325人、その内訳は医師117人、医学生30人、医療関係者133人、市民45人)に参加して頂き、白熱する議論で



第20回つどい
副実行委員長
江末 玉江

「核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどいin鹿児島」が11月21日、22日、鹿児島市内で開催された。

て、日赤長崎原爆病院院長でIPPNW長崎支部長の朝長万左男氏が特別講演をおこない、原爆投下半世紀を経てなお続く原爆後障害の実態を生々しいデータで紹介したうえで、核廃絶にむけた医師の役割の重要性を強調した。

その後の全体会では、鹿児島代表世話人がこの間の情勢と一年間の主な活動、今後の活動方針などについて提案。また、「鹿児島高校生1万人署名」や「原水爆禁止世界大会参加」の報告、学生部会のおこなわれた。2日目に



西郷隆盛の姿でアピールを
読み上げる実行委員



熱心に
講演を聴く
参加者



レセプション

の荒川譲氏、田中登氏、木村朗氏にお話を頂き、黒澤満氏、朝長万左男氏がコメントする形式を取りましたが、講演者とコメントイターとして会場との熱い議論が交わされました。意見があまり出ないときのことを心配していましたが、杞憂に終わりはほとんどありません。それどころか時間が足りずに20分もオーバーし、今後の課題として残りしました。

は、鹿児島大学法文学部教授の木村朗氏、鹿児島県原爆被害者協議会の田中登氏、鹿児島県原水爆禁止協議会長の荒川譲氏の3人による「平和・憲法・核問題を考える—今できること」と題したシンポジウムがおこなわれた。

学生部会・知覧見学報告

九州大学医学部2年生 藤本 佐和

学生企画で知覧の特攻平和会館に行ってきました。遺書・遺影・遺品が数多く展示してあり、同世代の男子たちがこの遺書を書いたときの心情や、爆弾を積み、戻ってこれられない飛行機に乗って亡くなっていったことに思いを馳せると、本当につらくなりました。でも、「なぜこうして死んでいかなければいけないのか?」、「崇高な犠牲の上に今日の平和があるのか?」と、すっきりしませんでした。そのあと解説をしてもらい、国家総動員体制のもと、それらの遺書には本当に書きたいことは書けなかったのだと聞き、戦争のとき、人は人ではないと実感しました。だから、二度と戦争を起こさないようにしていくことこそが、歴史から学び、未来をひらくものではないかと思えました。感じるものがたくさんあり、学生どうし、さまざまに思いを交流しました。

2日間の講演とシンポジウム、交流は、とても充実したものでした。被爆者の方々の「これで被爆者は最後」という願いを胸に、「人間の体も心も破壊する核兵器は人類と共存できない」ということを、普段からもっと差し迫った問題として考え、訴えていかなければ。また、情勢を正確にとらえ、その根本に何があらるかを見極め、どう働きかけたいかを真剣に考えたい、そして、運動する主体になりたいと思えました。「高校生1万人署名」の子たちのしっかりした姿に、とても励まされました。被爆者と世界の人がひとつに訴え、たまたまきた核兵器廃絶は、人びとの声と運動しだいで実現が見えてくる、今まさに好機です。反核平和の運動は、とてもやりがいのあるものになるはず。学生部会では、今後はもっと活動を広げていこう、具体的にしていこうと、医学生たちの積極的な思いが交流されました。全国、地域の仲間と連絡を取り合って、学びや運動の具体化へ動いていくつもりです。「核兵器のない世界を」国際署名、フィールドワーク、原爆写真パネル、被爆証言、学習会など、多彩にとり組み、仲間をひろげていきたいと思えます。いのちが尊重される、戦争も核兵器もない平和な世界へ!



全体会で報告する学生部会のメンバー

ガンマ線

記念すべき第20回「反核医師のつどい」は成功のうちに幕を閉じた。第1回は1987年に

東京で開かれ、途中、諸事情で開催されなかった年もあったが、ここ10年ほどは毎年秋の開催というパターンが定着してきた▼同時に今年は、広島でIPPNW(核戦争防止国際医師会議)の世界大会が開かれてちょうど20年になる。全国の少ない県がこれに呼応して反核医師の会を立ち上げた。あれから20年、核兵器をめぐむ状況はどう変わったろうか▼世界終末時計によれば、20年前は「終末」から6分前だった。その後、一時は17分前まで危機が遠のいたものの、現在は5分前まで針が進められている。明るい材料もある。世界の核弾頭数は20年前の約63000基から26000基へ半分以下に減った。核実験は北朝鮮など、まだ完全とはいえないが、今や表立ってはできない状況だ。また、非核兵器地帯は南半球の3カ所だったが、現在は北半球も含め6カ所に増えた。核保有国数はNPT(核不拡散条約)で認められた5カ国は不変で、それ以外では、南アフリカやリビア、ブラジル等が核開発を中止した一方、インド・パキスタン・イスラエルは事実上の核保有国となっている▼核兵器廃絶がかつてなく現実的可能性を帯びてきた今、IPPNW世界大会をもう一度日本で開催し、そこに首相や外相に來てもらうというのは如何であろうか (哲)

学習講演

「核兵器のない世界に向けて」

IPPNW大阪支部特別顧問、日本軍縮学会初代会長の黒澤満氏は、オバマ米政権の誕生前と誕生後の核をめぐる世界の状況と課題を明解に示し、以下のよう



講演する黒澤満氏

述べてきました。88年に成立した核不拡散条約(NPT)は、既に核兵器を所有する国以外の核保有を禁止するという差別性を是正するために、5年

方、オバマ米大統領によるプラハ演説「21世紀における核兵器の将来」により劇的な変化が起こり、世界は核軍縮に向けて動き出した。

しかし、「米国は核兵器の無い世界を追求する」ではなく、核兵器が存在する限り強力な抑止力を維持する」というオバマの考えには矛盾もある。彼らという「核セキュリティ」は、「核兵器、核物質の厳重な管理」という意味であり、最重要な課題は核テロリズムの防止である。手放しに歓迎されない要素もあるが、8年間のブッシュ政権時とは雲泥の差があることも事実である。多くの困難な問題がある。多くの困難な問題がある。多くの困難な問題がある。

鹿児島アピール

私たち、核戦争に反対する医師の会は(反核医師の会)は、「核はもうSAIGO! DONな兵器もいりもはん!!」をテーマに、2009年11月21・22日に鹿児島で節目となる第20回つどいを開催しました。

核廃絶の流れをもっと早く、大きく

基調報告

核戦争に反対する医師の会児嶋徹代表世話人より以下の基調報告がなされた。

I. 核廃絶に大きく動き出した国内国際情勢

- (1)核兵器廃絶への大きな流れを生み出したもの
(2)米オバマ政権の誕生と核を巡る情勢
(3)国連の役割に新たな希望の光
(4)原水爆禁止運動の理論的実践的到達点を学び、唯一の被爆国民として反核平和の運動をさらに飛躍させよう

II. 原爆症集団認定訴訟はまだ終わっていない「原爆症集団認定訴訟の最終確認書」について

III. 「核戦争に反対する医師の会(PANW)」の活動について

最先端の医学内容で、かつご自身の被爆体験にも触れられるなど、心に響く講演であった。

(埼玉県 大場敏明) (兵庫県 林祐介)

を驚愕させました。アメリカ大統領として初めて「核兵器を使用した唯一の国」として「道義的責任」を明らかにし、地球上から核兵器を廃絶する運動を進めることを表明しました。そして9月24日の国連安全保障理事会では「核のない世界」に向けた取り組みをうたった決議案が全会一致で採択されました。世界が地殻変動を起こしています。

あります。これまで日本政府などが取って来た「核の傘」論は世界の流れに逆行するもので、新政権に対しては被爆国日本の責任と役割を明確にし、核兵器廃絶に対する世界のリーダーシップを担うよう求めていかなくてはなりません。

て、世界中から核兵器をなくす具体的な運動にしていきたいと思います。昨年の大会では学生部会が結成され、今年も多くの医学生が参加しました。「医療」と「戦争」はまったく相容れることができません。核戦争は人間だけでなくすべての生き物を破壊させてしまいます。学生も含めて私たち医療従事者が立ち上がらなくてはなりません。一人一人ができることから始めることは勿論ですが、この一人一人の運動を

大きな輪にして核兵器廃絶を現実のものにしなければなりません。まさにその時期が到来しました。もうSAIGOに! DONな兵器も地球上からなくしましょう(いりもはん)!!

2日目 シンポジウム 最初のシンポジウムは鹿児島県原水協議長の荒川謙氏の「脱原発へのエネルギー政策転換を」と題して、現在増設計画中の川内原発3号機をめぐっての問題点を中心に報告した。原子力発電の危険性として特に、放射能の環境への放出、放射性廃棄物の処理技術の未完成、核物質を非合法集団が取得・使用する危険性などにもつき増設計画に対する反対を明確に述べた。

2日目 シンポジウム 縮「核拡散防止」という趣旨であったと述べた。その後東欧へのミサイル配備中止、ロシアとの軍縮交渉など、ブッシュ政権では考えられない政策を打ち出しているが、他方では、新しいミサイル開発推進。またアフガン、イラク戦争も全面撤回しているわけではない、とする。これに対しては助言者の中から厳しすぎ

る見方ではないかとの意見も出た。(沖縄県 武居洋) 参加者一同



報告するシンポジウム

特別講演

「核兵器は究極の疫病 半世紀を経てなお続く原爆後障害」

IPPNW長崎支部長の朝長万左男氏は、長崎大学名誉教授で、血液学を専門とし、原爆被爆の人体被害を研究されておられるトックラスの研究者である。



講演する朝長万左男氏

氏は、まず核戦争防止運動の原点についてのべられ、風の影響で2km以上西に爆心地が流されたので死を免れたが自らも被爆者であることに触れながら、原爆が究極の疫病的な害悪をもたらすものであり、人類とは共存できないものだ

が、共存させられてきた矛盾が、核兵器廃絶の原点であるとのべられた。また、IPPNWへの参加は、第4回からであり、核の危機で、地球が全滅する「核の冬」の問題指摘でノーベル賞をもらい、一時路線転換があったが、最近又、核廃絶を中心の運動、ICAN運動など、再びもりあがってきていることを紹介された。

半世紀を経てなお続く原爆後障害については、高齢者に出てきた新たな白血病のリスク、多重癌のリスク、最大5つの多重ガンなどが明らかにってきており、リスクの生涯持続性のメカニズムとしての幹細胞の障害、染色体異常について説

最後に遺伝的影響調査と内部被曝について、2世研究はこれからであり、今までの研究は2世が若いときのものであり、動物実験では2世への影響が出ているとのこと。また、内部被曝についても、最近の研究で、

全体会では、鹿児島高校生1万人署名活動報告が地元の高中生3人から報告された。

また、原水禁世界大会参加報告が鹿児島生協病院医師から報告された。

第20回「つどい」への祝電・メッセージ (順不同、敬称略)
鹿児島市長・森 博幸
広島市長・秋葉忠利
長崎市長・田上富久
鹿児島県医師会 会長・米盛 學
鹿児島市医師会 会長・鹿島友義
鹿児島県平和委員会
非核の政府を求める鹿児島県民の会
原水爆禁止日本協議会
日本反核法律家協会 会長 弁護士 池田真規
日本共産党衆議院議員・笠井 亮
日本共産党参議院議員・井上さとし
日本共産党参議院議員・小池 晃

JPPNWと連携した運動を

反核医師の会・常任世話人 大阪府 武田勝文

私はJPPNW大阪府支部運営委員もしている関係上、常に反核医師の会とJPPNW（JPPNW日本支部）と共同連携して核廃絶運動を進めていけないものか考えていました。JPPNW大阪府支部の成り立ちを紹介しますが、1983年7月、大阪府保険医協会の竹内、岩崎理事らの呼びかけと当時の稲葉大阪府医師会長の賛同を得て「核戦争防止大阪医師の会」が発足しました。その際事務局は保険医協会が担当しましたが、1988年、医師の会はJPPNW大阪府支部となりJPPNWの傘下に入りました。このような経緯もあって大阪府支部の運営委員には必ず保険医協会員が加わり毎月運営委

員会に参加しています。大阪にだけ反核医師の会がないのは上記の理由によりです。現在、日本で医師の組織する全国的な反核運動はJPPNWと「核兵器に反対する医師医学者の会」（PANW）しかないのですが、目的は同じなのに互いに交流がなく、各々の母体の政治的立場から関係はぎくしゃくし正常なものではありませんでした。1980年世界的なJPPNW結成を受けて、日本医師会に対し日本支部設立の打診がありました。当時

の日は原爆被爆地である広島県医師会に依頼しました。その結果1982年広島県医師会内の組織としてJPPNWが発足しましたが、自民党政

権下の体制内組織の枠から脱し切れず、政府批判を避ける傾向にありました。今でこそ明らかになつてきた核抑止論と核廃絶の矛

盾など、政府の核政策の批判なくして反核運動は成り立たない、政治的運動の側面があります。反核運動は共産党と同一に見られるといったばかげた偏見、認識不足もあり

ます。もし、そうであれば8月6日原爆記念日に広島に集まる何千人という人々は共産党支持者というありえないことになり

ます。それが両組織の協力ができてこなかった大きな理由であった面は否定できません。しかし自民党が支持したブッシュが消え去りオバマ大統領が出現、自民は大敗して民主党政権になりました。核廃絶の流れは日本でも共通の認識になりつつあります。JPPNWとPANWとの垣根は限りなく低くなり、連携共

同の絶好の機会が到来しつつあります。それは今年7月の北アジアン・南アジア地域大会の内容を見てもわかります。大阪では、先駆けて近畿反核医師懇談会が数年前に発足し、近畿圏のJPPNW支部と反核医師の会との合同の集まりを続けています。2月にはJPPNWの柳田理事を講演会に招いたし、全国規模で行われる「反核医師のつどい」には京都で片岡事務総長、今回の鹿児島には朝



反核医師の会は、11月12日に核廃絶にむけた各党国会議員への要請行動を実施した。写真中央は民主党犬塚直史参院議員。

長副支部長が講演者として来ていただきました。すでに連携は始まっているともいえます。今年、大阪で行われたJPPNWの移動理事会において、私はこの趣旨の提案を議題として提出しました。内容は来年スイスで開催されるJPPNW世界大会でのPANWとの共同開催分科会の提案です。具体的にあげたテーマは「世界の被爆者の実情」ですが、JPPNWでは来年の理事会で検討されるはずですが、結論はまだ出ていません。

JPPNWはJPPNW世界大会で重要な役割を果たし、国際的に認められた組織です。原爆の被害を世界に訴え、その医学的影響の学術的な発信に熱心で、医学生に対するサポートにも取り組んできました。しかし国内的には核廃絶の運動論においてやや不足する面があります。これに対しPANWは国際的には知名度も高く活発ではない（世界大会には必ず代表団を送っているが）様に思えるが、国内での活動はJPPNWに勝るといえます。それは毎年の「反核医師のつどい」の参加者の増加をみても、その内容の盛り上がりを見て分かるし、政府に対するロビー活動も積極的であります。この両者が共同で運動を盛り上げれば日本の医師の反核運動は大きく羽ばたき核廃絶に大きな力を与えることになるでしょう。

て、私はこの趣旨の提案を議題として提出しました。内容は来年スイスで開催されるJPPNW世界大会でのPANWとの共同開催分科会の提案です。具体的にあげたテーマは「世界の被爆者の実情」ですが、JPPNWでは来年の理事会で検討されるはずですが、結論はまだ出ていません。

JPPNWはJPPNW世界大会で重要な役割を果たし、国際的に認められた組織です。原爆の被害を世界に訴え、その医学的影響の学術的な発信に熱心で、医学生に対するサポートにも取り組んできました。しかし国内的には核廃絶の運動論においてやや不足する面があります。これに対しPANWは国際的には知名度も高く活発ではない（世界大会には必ず代表団を送っているが）様に思えるが、国内での活動はJPPNWに勝るといえます。それは毎年の「反核医師のつどい」の参加者の増加をみても、その内容の盛り上がりを見て分かるし、政府に対するロビー活動も積極的であります。この両者が共同で運動を盛り上げれば日本の医師の反核運動は大きく羽ばたき核廃絶に大きな力を与えることになるでしょう。

て、私はこの趣旨の提案を議題として提出しました。内容は来年スイスで開催されるJPPNW世界大会でのPANWとの共同開催分科会の提案です。具体的にあげたテーマは「世界の被爆者の実情」ですが、JPPNWでは来年の理事会で検討されるはずですが、結論はまだ出ていません。

JPPNWはJPPNW世界大会で重要な役割を果たし、国際的に認められた組織です。原爆の被害を世界に訴え、その医学的影響の学術的な発信に熱心で、医学生に対するサポートにも取り組んできました。しかし国内的には核廃絶の運動論においてやや不足する面があります。これに対しPANWは国際的には知名度も高く活発ではない（世界大会には必ず代表団を送っているが）様に思えるが、国内での活動はJPPNWに勝るといえます。それは毎年の「反核医師のつどい」の参加者の増加をみても、その内容の盛り上がりを見て分かるし、政府に対するロビー活動も積極的であります。この両者が共同で運動を盛り上げれば日本の医師の反核運動は大きく羽ばたき核廃絶に大きな力を与えることになるでしょう。

て、私はこの趣旨の提案を議題として提出しました。内容は来年スイスで開催されるJPPNW世界大会でのPANWとの共同開催分科会の提案です。具体的にあげたテーマは「世界の被爆者の実情」ですが、JPPNWでは来年の理事会で検討されるはずですが、結論はまだ出ていません。

ICNNDに関する核兵器廃絶ヒロシマ行動で4つのイベント

反核医師の会・常任世話人 広島県 青木克明



原爆ドーム前のキャンドルメッセージ（10月17日）

オバマ大統領のプラハ演説以降、核兵器廃絶を目指す動きが加速しています。ICNND（核不拡散・核軍縮に関する国際委員会）は2008年に日豪政府主導で立ち上げられ、15カ国からの委員が来年の核不拡散条約会議に向けて報告書を作成しています。今回4回目の会合が広島で開かれる機会に、ICNNDにアドバースをしてきた国内のNGO連絡会は委員たちに生の声を届けるために4つのイベントを行うこととなり私たちは現地実行委員会

を担当しました。10月17日昼には委員と市民のラウンドテーブルディスカッションがあり、本当はあなた方の席に座りたいと発言する委員もいました。午後には市民球場で、広島市主催の「2020」人文字作成に協力。夕方からは原爆ドーム前で1000個のキャンドル・メッセージ「NUCLEAR FREE NOW!」（今こそ核兵器廃絶を！）を行いました。委員たちは宿舎へ向かう途中、全員バスから降りて参加し、共同議長のリヤレス・エバンズ氏、川口順子氏が挨拶をしてくれました。18日は世界平和記念聖堂で国際シンポジウム「核兵器のない世界へいまこそ飛躍を！」ヒロシマ

マから2010ニューヨークへ」が開催されました。来賓の秋葉市長はNGOの役割に期待しており市民レベルでの報告書を作成してほしいと挨拶。豪州のNGOアドバイザー、ティルマン・ラフ氏、日本被団協の田中照巳氏、英国の軍縮研究家レベッカ・ジョンソン氏、日本のNGOアドバイザー川崎哲氏によるシンポジウムがおこなわれ、最後に核兵器廃絶の早期実現を目指して国際社会、ICNND、日本政府、日本の市民社会に対して訴える集会決議を採択しました。ICNND委員会がヒロシマでの市民の声にこたえて時代の流れに沿った前向きな報告書を作成することを期待します。

ICNND広島会合国際シンポジウムに参加して

反核医師の会・常任世話人 兵庫県 武村義人

2009年10月18日世界平和記念聖堂において、シンポジウムが開催された。この聖堂は広島に投下された原爆の犠牲者の追憶と、慰霊のために、また世界の人々の友愛と平和のしるしとして、1954年に建立されたもの。3年前に国の重要文化財に指定されている。

考えてみれば生まれてはじめてのこと、気持ちを集中して音楽に浸る。かなり心地よい、祈りをささげる場の雰囲気として最高である。開会に際して来賓の挨拶、秋葉忠利広島市長である。さすが情勢に長けていてその内容も意味深いものであった。同様の内容を後日このICNNDに参加した、ウイリアム・ペリー氏が11月8日付け朝日新聞にこう述べている。「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」の最終報告は、『実現すればいい』という希望ではなく、政治的意思があ

れば実行に移せる現実的な行動を記した、『少しでも前のめりな』内容である。核の先制不使用、包括的核実験禁止条約（CTBT）の批准すら困難な現実を前にしても、『核なき世界』へ大幅な核軍縮をする環境は整った。今こそ各国に行動を強く促すときだ。」

日本でも鳩山内閣に対し、米の核先制不使用の態度、核の密約問題、基地問題など、世論によって政府を変えていくチャンス。キリスト教徒ではないが、荘厳な教会の中で心が洗われるように感じた。

オープニングは聖堂備え付けのパイプオルガン演奏だ。少々ざわつく会場であり、最初の音のバックミュージックと想っていたが、振り向けば正面入り口の階上にある立派なパイプオルガンの生演奏である。

このICNNDに参加した、ウイリアム・ペリー氏が11月8日付け朝日新聞にこう述べている。「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」の最終報告は、『実現すればいい』という希望ではなく、政治的意思があ

れば実行に移せる現実的な行動を記した、『少しでも前のめりな』内容である。核の先制不使用、包括的核実験禁止条約（CTBT）の批准すら困難な現実を前にしても、『核なき世界』へ大幅な核軍縮をする環境は整った。今こそ各国に行動を強く促すときだ。」

日本でも鳩山内閣に対し、米の核先制不使用の態度、核の密約問題、基地問題など、世論によって政府を変えていくチャンス。キリスト教徒ではないが、荘厳な教会の中で心が洗われるように感じた。

世界平和記念聖堂での国際シンポジウム（10月18日）

各地の反核医師の会から

宮城反核医師歯科医師の会

世界の大勢は核兵器廃絶へ 第20回総会を開催

核戦争を防止する宮城医師歯科医師の会第20回総会が10月3日にフォレスト仙台会議室で開催された。同会は今年度で結成20周年を迎え、これまでの核兵器廃絶にむけた取り組みが報告された。

新年度の活動計画では、県内の医師、歯科医師、医学生に反核・平和の世論を



第20回の総会のもよう

たかめ憲法9条を守り、核兵器廃絶の運動に取り組むことなどを決めた。採択された総会アピール

核戦争を防止する石川医師の会

「核兵器のない世界」へ政府は責任を果たせ 県内全自治体を訪問し、12月議会に請願・陳情を提出

核戦争を防止する石川医師の会も参加する「核兵器のない世界」国際署名をすすめる。2010年国連に代表を送る県実行委員会は、来年5月にニューヨークで行われる核不拡散条約(NPT)再検討会議

政府の責任を果たすことを求める意見書の提出を求め、請願(陳情)を提出し、採択を求めることを決めた。11月中旬に県内の全自治体を訪問するキャラバンを行った。請願(陳情)するのは、①核兵器廃絶を主題とした国際交渉を開始すること、②核兵器保有国に対して、来年の国連・NPT再検討会議で、核兵器廃絶を達成する「明確な約束」を再確認することを求め、その実現に向けて最大限の努力を行うこと―の2項目である。



かほく市議会議長(右)に請願書を手渡す実行委員会メンバー

11月19日には5人が参加して、能登地域の11の自治体を訪れた。このうち、かほく市には神田順一・同実行委員会事務局次長ら3人が訪問し、杉本成一・同市議会議長に請願書を提出し

滋賀医師の会

2010年NPT再検討会議集會に代表派遣

核戦争防止滋賀県医師の会(運営委員長 上島弘嗣)は11月8日、立命館大学びわこ・くさつ

では、オバマ米大統領のプラハ宣言、国連首脳級特別会合の決議など2009年度は「核なき世界へ」の新たな出発の年であり、平和団体、市民ともに核兵器のない世界、戦争がおこらない世界に向け活動強化を呼びかけた。

記念行事では、広島の「原爆の子の像」を作った子どもたちの活躍を描いた映画「千羽鶴」(監督・木村莊十二)が上映された。

キャンパスで第25回総会を開催した。総会では2008年度活動報告、決算報告が承認された。特に2005年度に引き続いて、2010年に開催される核兵器不拡散条約(NPT)再検討会議要請行動に、代表を派遣することなど2010年度活動方針が承認された。役員改選では、新役員に上島運営委員長代表以下9人の運営委員と監事が承認された。続いて「平和の大切さ、核兵器廃絶の重要性を語る」と題し、2008年度ノーベル物理学賞受賞の京都産業大学・益川敏英教授の記念講演があった。益川教授は「戦争体験は5歳の時名古屋で被災した。我が家の近隣は焼夷弾



益川敏英教授と上島弘嗣代表

で全て焼け野原になった。今核兵器だけを問題にするのはおかしい。通常兵器でも野蛮な兵器はあり、兵器そのものを無くす運動を展覧させてほしい。核兵器を使わない、核兵器を持たないで国と国の関係を作らないうと、核兵器はなくなるならいい」。益川教授は時にはユームアを交え、参加した670人の聴衆を魅了した。

第21回準備がスタート 奈良実行委員会からの報告

奈良反核医師の会を結成して丸2年を経過している時期に、世話人会でつどい開催を検討した。近畿ブロックの支援を要請して、核廃絶と平和の願いをシルクロードの東の終着点である奈良から日本全国に、世界に向けて発信しよう、開催に手を挙げた。現在、世界は核廃絶に着実に歩み始めた。核廃絶の気運が高まりつつある来年は、画期的な年になるので、奈良でつどいを開催することは、大いに意義がある。

来年はNPT再検討会議の年で、市民運動がどの程度盛り上がりつつあるだろうか。つどいでは、奈良の平和運動の特色を出すこと、そして世界の反核・平和の動きを市民の皆さんと医学者と共に学習したい。また、来年は奈良遷都1300年祭がある。その様々な行事の関係で、主たる会場が公



第21回実行委員会・坪井裕志事務局長

書評

「アフガンに命の水を」

ペシャワール会とは、中村哲医師のバキスタンでの医療活動を支援する目的で結成され、1984年より現地活動を開始している。アフガンに命の水を用水路で拓いたペシャワール会26年目の闘いのドキュメンタリーであるこの作品を紹介する。2003年3月から、6年の歳月をかけ全長24キロの用水路を拓いた一人の日本人医師(中村哲)と数十人の日本人青年達。そして共に働いた延べ60万人のアフガン人。戦乱と干魘のアフガニスタンに3000haの田畑が甦った物語である。

中村医師はアフガニスタン東部の山岳地帯に診療所をつくり20年に渡り医療活動を続けてきた。2000年夏大早魘がおき、水が無いために皮膚病が蔓延し、診療所の周りが砂漠化する。飢えや渴きは医療では治せない。命の水を求めて気温50度の暑さの中、井戸の掘削が始まった。資金は全てペシャワール会の寄付金で賄われた。600人の村人と全ては地道な手作業であった。何故なら、地元の人々が自力で補修をし、長く使うことが出来るからだ。掘り始めて40日、深さ40mから汲み上げた地下水が大地を潤す。その後1年間で約600の井戸を掘った。2001年10月テロの

影響で空爆が始まり、国際援助団体は撤退するも、中村医師は「難民を出してはならない」と空爆を避け深夜にトラックで首都カブールへ食糧輸送し、24万人が命をつないだ。2002年1月、田畑は干魘で荒廃し、人々の平和な暮らしを取り戻すには井戸だけでは足りない。と、「緑の大地計画」内容は、24キロの用水路を作り、クナール川(氷河の雪解け水を源流とするので何十年と涸れない)の水を荒れた地に引き込むことが出来れば、広大な土地(3000ha)を甦らせることが出来ると無謀ともおもえるこの計画にも中村医師には迷いがなかった。

2003年3月600人の住民が集まり作業開始。使うのは土と石。石の文化が根付くアフガニスタンは誰もが石の扱いに長けていた。新たな雇い(日当240円)を生み、延べ60万人が働いた。途中治安が悪化し、中村医師の2つの診療所を閉鎖した。試験農場では、サツマイモやお茶などの栽培に成功。2008年には雑草さえ生えない土地が広大な麦畑へと姿を変えた。水路を維持するために護岸の補強を繰り返した。カンベリ砂漠(幅5キロ、長さ20キロ)には200haの自立定着村が拓かれた。

学校を建てても行けるのは限られた階層の子供だけなので、全ての子供達に教育機会を与えることを目的にモスクとマドラサ(伝統的神学校)を建てた。2008年8月には日本人スタッフ殺害の悲しい出来事もあった。今も戦乱の止まないアフガニスタン、中村医師の闘いは続いていく。

中村医師の医療活動を含め現地での取り組みには感動の連続であった。人々から感謝される人でありたいと強く感じた作品であった。

(佐賀県 千葉研介)

<http://www1.biglobe.ne.jp/~peshawar/>



定価: 本体2500円+税